

令和8年度第1回舞鶴市総合計画審議会 議事録（概要）

開催日時：令和8年5月1日（金）14時00分～16時00分

開催場所：市政記念館

出席者：別紙委員名簿のとおり

事務局：舞鶴市政策推進部企画政策課

【次 第】

1. 開会

2. 市長あいさつ（要旨）

- ・本日はご多忙の中、総合計画審議会にご出席いただき感謝申し上げます。委員の皆様には、日頃から市政の推進にご協力をいただき感謝する。
- ・次期総合計画の策定にあたり、市民参加型の「#みんなでつくる舞鶴2040」プロジェクトを通じ、約2,000件の幅広いご意見をいただいた。
- ・2月に開催した第2回審議会での皆様からのご意見と、これら市民の声を反映させた「次期舞鶴市総合計画基本構想案」をとりまとめ、本日諮問する。この基本構想が今後の実行計画のベースとなる。
- ・委員の皆様からは忌憚のないご意見をいただき、活発な議論を行いし、妥協のない総合計画を作っていききたい。

3. 委員紹介

4. 議事（舞鶴工業高等専門学校 校長 林 康裕 委員長による進行）

（1）諮問 次期舞鶴市総合計画・基本構想案について

事務局より説明

（2）意見交換

《京都府北部地域連携都市圏振興社 植本委員》

今回の基本構想案は非常に分かりやすく、希望が持てる内容である。

観光の観点から申し上げますと「世界を魅了するまちづくり」という言葉が入ったことが魅力的である。大型クルーズ船の寄港も予定されており、舞鶴港は世界とつながる場所であり、これまでの国内中心の観光から世界に向けた視点へ変え、舞鶴ブランドとして世界水準の高みを目指し、発信していくことが大切だと考える。オール舞鶴で進めていく気持ちが大事である。

《まいづる環境市民会議 尾上委員》

都市づくりと都市計画の観点から申し上げます。

市民の意見にもあるように、車の運転ができなくなっても自由に移動できるまち、高齢者だけでなく小さな子供やベビーカーを利用する子育て世代、さらには車椅子の方など体の不自由な方にとっても、段差の解消や歩道の拡幅、わかりやすい案内表示の設置などを通じ

て、誰もが安全かつ快適に移動でき、不便を感じることなく日常生活を送れる「利便性の高いまち」を目指していただきたいと考える。

実行計画において詳細は協議することになるが期待している。

《舞鶴市社会福祉協議会 荻野委員》

2040年に目指すべきまちの姿が、具体的に示されており、イメージが湧きやすく希望が持てる内容である。この目標が市民に浸透することが重要であり市民に広く浸透し、市民が主体的に地域づくりに関わるのが重要である。

地域おこしに関わる内容として、現状、高齢者の孤立や若年層の引きこもり・不登校が課題となっている。社会福祉協議会でも引きこもり支援の取り組みを始めているが、多世代が交流できる居場所づくりが非常に重要である。ふれあいサロン等にこどもが来て交流できるような形になれば良いと考える。

《舞鶴市スポーツ協会 渡辺委員》

スポーツは、単なる競技や健康づくりの手段にとどまらず、世代を超えた市民の日常的な交流や、地域に根ざしたコミュニティ形成の重要な場として機能している。

当協会加盟団体の事業だけでも約1万5千人が参加しており、実に多くの方がスポーツを通じて他者と関わり、日々の活力を得ている。この数字は、スポーツが舞鶴市の活性化において果たす役割の大きさを物語っている。

学校体育館のエアコン整備について、夏場の活動における健康保持のため、夜間や休日等の利用も検討していただきたい。

また、郷土愛醸成のため、こどもたちが舞鶴の歴史を学ぶ機会を充実させてほしい。

《市長》

全中学校において計画通り空調整備を進めている。文化公園体育館においても空調等を整備した。今後の気候変動に対応し、安心安全にスポーツができる環境づくりを進めていく。

《NPO法人まちづくりサポートクラブ 嵯峨根委員》

今回の構想案は素晴らしいものだと感じた。一方で、13年後の2040年の世界を想像するのは専門家でも困難であるため、期間を「4年・4年・5年」で区切って再検討する方向性は非常に良い。「こうありたい」ということに加え、将来的に「舞鶴としてこれはしてはいけない」ということも検討に加えると、より膨らみのある構想だと考える。

《市長》

新しい社会の形を地方都市から作っていくという覚悟が必要である。自動運転の時代を見据えた移動手段の確保など、具体的な政策の中で途中での軌道修正は必要になると考えており、この区切りを軌道修正と総括の場と位置づけたい。

その一方で、この13年間という長期的かつ重要な計画期間において、本市が目指すべき将来像や根本的な理念については、いかなる社会情勢の変化があろうとも決してぶれることなく、確固たる信念を持って力強く前進していく決意である。

《京都交通株式会社 福井委員》

公共交通における人員不足、担い手不足は深刻である。これからの13年間で、既存の枠組みに固執せず、ライドシェアや先進技術を導入した舞鶴オリジナルの新たな交通システムを構築していく必要がある。

「歩くまち」といった観点も見据え、誰もが安全かつ快適に移動できる環境整備とともに、自助・共助の精神に基づいた地域交通のあり方や、SNS等での高い評価を本市のブランド価値向上や観光振興へ戦略的に結びつけていく視点も、まちの持続可能性を高める上で極めて重要である。

《NPO法人まいづるネットワークの会 上野委員》

ダイバーシティについて、現在多くの外国人労働者が舞鶴におられるが、文化や子育て環境の違いによる戸惑いが見られる。また、言葉の違いなどで災害時の情報伝達は困っている。介護分野での深刻な人手不足などを外国人が支えてくれている現状を踏まえ、国籍に関わらず地域で支え合える「オール舞鶴」のまちづくりと、自助・共助の意識向上が必要である。

《舞鶴自治連・区長連協議会 福本委員》

少子化と人口減少により、自治会活動において地域のつながりを再構築していく必要がある。基本構想に「市民がつながり、豊かさを自らが高めている」とあるが、13年間で様々な課題を克服し、地域の基盤である自治会がしっかりしているまちを目指すことが全ての分野において基本となると考えている。

その中で、基本構想案の④心地より暮らしが進化するまちにおける、「市民がつながり～」の項目を先頭にしていただきたい。

《市長》

福井委員の「ウォーカブルなまち」の観点は健康的にも重要であり、現在東舞鶴駅周辺などでの歩道整備等を進めている。

上野委員のダイバーシティについては、外国人住民については労働力としてだけでなく、市民として共生していくことが大前提であり、市の施策として進めていく。

福本委員の発言された自治会活動については、人が減るからこそつながりを強める必要があり、行政との壁を取り払い、自助・共助・公助の中で地域コミュニティを考えていきたいという強い思いを持っている。項目の順番見直しを含め検討する。

《舞鶴市文化協会 田中委員》

文化芸術の振興について、伝統文化の継承のみならず、現代の子供たちの主流であるメディアや漫画等の新しい文化（サブカルチャー）への支援もお願いしたい。若い世代が参画しやすい環境整備を要望する。

《舞鶴青年会議所 坂根委員》

青年会議所は70周年を迎える節目の年であり、10年先のビジョンを検討している。その中で、子供たちの郷土愛の醸成やUターン促進は共通の課題であると考えている。「目指すべきまちの姿④」の「住み慣れた地域」という表現について、移住者や転入者にとっても包

撰的であるよう「どんな人でもいきいきと自分らしく暮らせる」といった表現の方が良いのではないか。

《市長》

あえて移住者と生まれ育った人を分けている意図はないが、表現については委員間でご議論いただければと思う。

《社会福祉法人大樹会 大橋委員》

若者が舞鶴に戻ってくるためには、魅力ある働き場所（企業誘致）が必要である。

また、人手不足により看護師が疲弊により離職、看護師の離職により病院関係者が非常に疲弊している。救急医療等を維持し、病院が潰れるような事態を防ぐためにも迅速な対策を講じていただきたい。

《市長》

魅力あるまちづくりとは、単に一部の機能や産業を強化するだけでは実現できないと考えている。新たな雇用を生み出し経済の基盤を支える「企業誘致」はもちろんのこと、日常を豊かにし市民のつながりを育む「スポーツ活動」や、地域の誇りやアイデンティティを醸成し世界へも発信できる「文化活動」など、これら多様な要素が互いに補完し合い、複合的に機能することで初めて、人々を惹きつける力強い「まちの魅力」へと昇華されると考えている。

医療については、疲弊している状況から脱却するために現在4つある総合病院を東西1つずつに集約する基本的な方向性を令和8年中に公表すると公言している。患者にとっての安心安全な医療と、医療従事者の環境改善の両立を目指し医療大改革を進めている。

《舞鶴医療センター附属看護学校 山口委員》

学生数が減少する中でも、在学生の6～7割は舞鶴や京都府北部に残りたいと考えている。小さな頃から郷土愛を醸成することが必要である。戻ってきたい人への支援だけでなく、今地元にいる学生を大切に、地元での継続的なキャリアを支援すべきである。

また、小中高の連携など、在学中からまちづくりに参加できる機会を設けることが地元定着につながると考える。

《舞鶴市PTA連絡協議会 石倉委員》

高校卒業後、市外へ進学や就職をして舞鶴に戻ってこない現状に懸念がある。

また、小学校の放課後児童クラブ（学童クラブ）について、3年生までとなっている現状があるが、共働き家庭を支援するため4年生以降（6年生まで）の受け入れについても考えていただきたい。

《京都職業能力開発短期大学校 中部委員（小菅委員代理）》

地元企業と連携し、人材確保に向けた課題に対応するため、今年度から新たに市内の高校生を対象とした合同説明会を開催する予定である。高校生は親や学校の情報に左右されやすいため、企業や学校が直接キャリアパスを伝えることで、若者の地元定着を促進していきたい。

《舞鶴商工会議所 嵯峨根副委員長》

素晴らしい基本構想であるが、これを具体的に実現していくのは難しく、限られた財源や人員の中で全ての施策を同時に進行させることは難しいため、緊急性や波及効果の高さを見極め、優先順位をつけて段階的に進める必要がある。着実なロードマップに基づく実行が求められる。

学校の教師や保護者が、学生を大都市圏の大手企業へ導こうとする傾向があるが、市内には約1,100社の中小企業がある。大企業のように初任給が高い訳ではないが、中小企業ならではの利点（将来経営陣や役職に就けるチャンス等）を若者や保護者にしっかり伝えていくべきである。

また、新幹線誘致が企業誘致等に繋がり人手不足の解決にもなると考えている。

《株式会社京都銀行東舞鶴支店 川井委員》

13年という計画期間は今の時代において非常に長く、4年間という期間でも長く感じる。社会情勢の変化により基本構想自体を見直さなければならない状況も想定し、計画の改編に関するルールを盛り込んでおくのも考え方の1つではないか。

また、計画の根底にある最も重要な視点として、全ての市民が日々の暮らしの中で豊かさを実感し、自分たちの住む舞鶴というまちを心から好きだと言えるようになること、そして、その魅力を内外に対して誇りを持って語れるようなシビックプライドに満ちたまちへと成長していくことを強く期待している。

《舞鶴工業高等専門学校 林委員長》

13年を待つのではなく、最初の4年間でスタートダッシュを切ることが極めて重要である。これまでの重荷を排除し、新しい取り組みを勇気を持って進めていただきたい。人口減少社会では小中学生も含む個人の資質向上、すなわち「教育」の果たすべき役割が最優先事項とすべきである。生涯学習やスタートアップ支援も含め、様々な機関が連携していく必要がある。例えば、国が50%といているところを舞鶴市の理系人材を70%にするという目標を持ち、良い人材が育つことで企業を惹きつける好循環を創出すべきである。

また、真剣にコンパクトシティ（都市機能の集約）を目指すべきである。税制や土地利用のあり方も含め、推進していくことが最も重要なポイントである。

《市長》

林委員長、小菅委員代理から発言のあった教育について、義務教育より先の高等教育機関との連携が取れていない課題がある。小中学校と高専、府立学校などが連携し、「一人の舞鶴の子ども」として育成していく考え方で進める意向である。

コンパクトシティについては、基本構想案の目指すべきまちの姿⑤に集約されており、東西駅前を中心に機能を集中させつつ、農村部との色分けをして対応していく計画である。

嵯峨根副委員長のご指摘や川井委員のお考えは、基本構想のキーワード「人」「愛」「誇り」の理念そのものである。若者の地元残留率は7～8割に上るが、大人が「舞鶴には何もない」と発言することが流出の一因となっている。だからこそ、市内の約1,100社の中小企業が持つ可能性を、大人が正確な数値を持ち子供たちに伝えていくことが不可欠である。

また、市民が日々の暮らしに豊かさを実感し、「舞鶴が好きだ」という誇りを持ってなければ真のまちづくりとは言えない。社会情勢に応じた見直しのルールを持ちつつも、この「人・愛・誇り」の理念だけは決してぶれることなく、優先順位を明確にして着実に進めていく。

石倉委員からの学童クラブについて、現状は3年生までとなっているが、国としては6年生までを対象とすることが原則であり、市としても6年生まで対応できるよう市内での議論を開始したところである。